

学会だより

JDDW2017 第59回 日本消化器病学会大会

木下 芳一

(島根大学内科学講座第二)

JDDW (Japan Digestive Disease Week) は日本消化器病学会、日本消化器内視鏡学会、日本肝臓学会、日本消化器外科学会、日本消化器がん検診学会の5学会が合同して行う世界でもっとも大きな消化器疾患にかかわる学会で、2万人以上の参加者が出席し3,000以上の演題が発表される巨大会である。日本消化器病学会の秋の全国大会はこのJDDWに参加する形で開催されており、第59回日本消化器病学会大会は杏林大学外科の杉山政則教授を会長としてJDDW2017の中心学会として福岡で開催された。開催場所は博多の福岡国際会議場を中心とした会議場群で、開催期間4日のうち最初の3日は学術会議が行われ、4日目は教育講演会が行われた。学術会議部分のプログラム構成は参加する5つの学会が相談をし、複数の学会がサポートするシンポジウムやパネルディスカッション、ワークショップが並んでおり、5学会の密な連携を感じさせる構成となっている。各学会の専門性はそれぞれ少しづつ異なるが、患者の診療には互いに協力して当たっており、学会のプログラム構成にも消化器疾患に関係する各専門家集団の協力体制の強さを感じさせる。

杉山教授は胆膵領域の疾患の診療を専門とされているが、胆膵領域の癌のハイリスクグループのスクリーニングの在り方、診断のための新しい画像診断、化学療法法の進歩などに関する専門的な主題セッションが並び、会長の「胆膵領域の癌の治療成績をより改善したい」という強い思いを感じることができた。これに加えて炎症性腸疾患や機能性消化管疾患など、多くの消化器科医の注目度が高く患者数も多い疾患の主題がバランスよく配置され、杉山会長の配慮がうかがえた。また、今回の学会では学会の倫理指針に関係する特別セッションが設けられたり、日本の医療制度に関する特別講演や日本消化器病学女性医師・研究者の会が行われたり、

学術的な内容だけにとどまらず、日本の消化器診療の今後の在り方に関する視点の高い話題も討論されていた。

私は会期中は学会会場で過ごし、時間のある限り学術セッションに参加したが、薬剤性消化管障害のワークショップ、バレット食道癌の国際パネルディスカッション、倫理関連セッションなどは大きな会場であるにもかかわらず満席に近く、これらの領域への関心の高さを感じることができた。またゲノム医療と消化器癌のワークショップでは最近各種のがん医療で取り上げられることが多くなっている precision medicine の現状と将来に向けた研究の成果が発表されていた。消化器癌領域では precision medicine の実施はまだまだ限られたものであるが、近い将来癌患者の半数以上を占める消化器癌にも癌組織の個々の遺伝子発現パターンに基づく治療選択が可能となる日が来るだろうと期待される印象を強く受けた。

学会期間中はあいにく天候には恵まれなかったが、会場の中は熱気に包まれた大変勉強になる学会であった。来年の第60回日本消化器病学会大会はJDDW2018に参加して2018年11月1日から4日まで神戸市のポートアイランドのポートピアホテルと国際会議場、国際展示場を中心に開催される。私は来年の日本消化器病学会大会の会長を務めるため、現在その準備に追われている。「臨床医学とアカデミズムの融合」を基本方針として学会のプログラム編成を行っているが、本年の大会に負けない意義のある学会となることを目指している。来年の学会から演題発表に関する倫理規定が少し変更となるため倫理規定の改正に対応する準備を早めにしていただき、来年の神戸での第60回大会にも多数の演題が投稿され、たくさんの参加者が集まられることを期待している。